

命 (3) 講演記録を読んで ～いのちを守る活動から～



放射能廃棄物の危険を示すシンボル

横浜港南台教会で 8 月の平和聖日に「**原発事故の向こうに見えること ～いのちを守る活動から～**」の講演会を開き、記録を通信No. 48 に載せました。社会委員会委員長が巻頭で、この講演に「衝撃を受けました」と記されていますが、私も読み進めるうちに、行間から、嗚咽、悲鳴のようなものが聞こえ、福島の方々の苦しい胸の内を感じてしまいました。講演者は**会津放射能情報センター代表、若松栄町教会信徒の片岡輝美さん**です。福島第一原発事故を受けて、福島に住んでいる方々がどのような目にあっただのか、その現状を細かく報告してくださいました。私にとって大事だった点を簡単ですが、記します。

(1) 避難

福島は安全神話を受け入れ、原発と共に暮らしてきたため、原発事故後も避難体制が全く考えられていなかった。その背景に新幹線や幹線道路が原発の 50 km～60 km の距離にあり、これらを封鎖することは、経済上想定外である政府、行政、企業の政策ありきだった。そのため避難する人は卑怯者視された。菅直人前首相は原発から 170km までは避難すると最初は言ったが、現在は 20 km 圏内が避難、または放射線量により区分け、分断され、強制避難か、自主避難かで、援助や対応に差があるため、県民同士の対立、利害意識がある。ご本人は子どもを思ってパニックになり、やっと新幹線で避難できた。現在は帰宅し、避難用のマイクロバスを常備している。

(2) 放射線量

日本における一般公衆の被曝線量(医療除く)限度は年間 1mSv と定められていたが、事故後年間 20 mSv に引き上げられた。したがって、年間積算放射線量が 20mSv 以下であれば安全な地域となり、帰宅準備が勧められている。1時間当たりの線量は 0.05 μ Sv/h が基準値であったが、現在、環境省は 0.4～0.6 μ Sv/h、つまり、10 倍ほどを許容範囲としている。しかしこの数値が安全を保証するのか、または、正確な数値なのか、情報を信頼することが困難である。不信感がつり、各自が線量計をもって、各自で安全かどうか、判断して生活している。また、安定ヨウ素剤を購入した。

(3) 現在の状況

復興ムードで、莫大な税金が投入されて、箱もの建築中。また IAEA 等が安全神話の復活を目論む。原発から 30 キロ圏内に、中高一貫校の新設が決定。小児甲状腺がんの検査があり、かなりの数の小児の発病があるが、検査結果の開示が不明瞭なうえ、責任者も不明。県民健康調査検討委員会は、医療訴訟に備え 10 億円の保険に入った。震災関連死者が 1739 人に達し、震災直接死者 1603 人を越えた。

(4) 「会津放射能情報センター」の取り組み

放射能の数値を収集し、情報を発信。食品放射能測定器購入、空間線量測定器購入、土壌測定器購入。何よりも、原発事故を繰り返さない社会を作るために、脱原発をアピールし、学習会、健康相談会、しゃべり場を持ち、保養プログラムを利用している。自分で安全かどうか、一つ一つ確認する。

このように、毎日が地雷原の上で生活しているような、不安と危険のなかで、彼女たちは懸命に考えながら、闘っています。そして、平和を作り出すために、共に働きましょうと訴えておられます。

私たちの最大の苦しみは「真実が隠されている」という不安です。本当に命を大切に守る安全な世界に、私たちは暮らしているのでしょうか。経済を優先し、地方や過疎地に甚大なツケを負わせて、見るべきものを見ず、その場しのぎをしているのではないのでしょうか。



2011年3月16日 福島第一原発